



佛^{ぶつ}前^{ぜん}勤^{こん}行^{ぎょう}次^し第^{だい}
西^{さい}國^{こく}三^{さん}十^{じゅう}三^{さん}所^{しょ}巡^{じゅん}禮^{れい}

白 水 文 庫 5

四 国 八 十 八 ヶ 所 靈 場 第 二 十 二 番 札 所 平 等 寺
平 等 講 事 務 局 発 行

凡例 はんれい

- 一、青文字 あおもじは「経頭 きやうとう」が一人 ひとりでお唱え となする「頭 とう」であることを表 あらわします。
- 二、項目名 こうもくめい以外の黒文字 くろもじは、皆 みなで唱和 しやうわする「助 じよ」であることを表 あらわします。
- 一、灰色 はいいろの文字 もじは住職 じゆうしやくが付 つけ足 たした解説文 かいせつぶんであることを表 あらわします。
- 一、複数名 ふくすうめいで読経 とぎやうする場合 ばあい、一名 いちめいが「経頭 きやうとう」となり、他 ほかは「助法 じよほう」となります。
- 一、複数回唱 ふくすうかいとなえる項目 こうもく（「三帰 さんき」など）は、一回目 いつかいめの青文字 あおもじのみ「頭 とう」となります。
- 一、お一人 ひとりで読経 とぎやうする場合 ばあい、「頭 とう」「助 じよ」共 ともにお唱え となください。
- 一、「諸真言 しよしんごん」には各札所 かくふだしよごとの札所本尊真言 ふだしよほんぞんしんごん・祖師等 そしなどの御宝号 ごほうごう・御詠歌 ごえいかを掲示 けいじしています。が、札所本尊 ふだしよほんぞんとおなじお堂 どうに寺院本尊 じいんほんぞんがおまつりされている札所 ふだしよには、その仏さま ほとけの真言 しんごんも併記 へいきしています。



西^{さい}國^{こく}三^{さん}十^{じゅう}三^{さん}所^{しょ}巡^{じゅん}禮^{れい}

佛^{ぶつ}前^{ぜん}勤^{ごん}行^{ぎょう}次^し第^{だい}



先^{らい}禮^{はい}拜^{はい}

と 仏^{ぶつ}前^{ぜん}に 至^{いた}れ ば 堂^{どう}正^{しょう}面^{めん}を 避^さけ 傍^{かたわら}ら 一^{いち}に 礼^{らい}に 寄^より 衣^え体^{たい}と 姿^し勢^{せい}を 整^{ととの}え 胸^{むね}の 前^{まえ}で 合^あ掌^{しょう}し 一^{いち}に 礼^{らい}に 或^{ある}は 三^{さん}衣^え體^{たい}と

おん

さ

らば

た

た

ぎや

た

はん

な

ま

んな

のう

きや

ろ

み

Skt. om sarvatathāgatapādaṇḍanam karomi/

私^{わたし}はあらゆる御^み仏^{ぼつ}の御^み足^{あし}に礼^{らい}拜^{はい}します。

次開經偈

一遍

無上甚深微妙法
百千萬劫難遭遇

我今見聞得受持
願解如來眞實義

最上の教えにはなかなか出会うことができないが、私は今、その教えを見聞きする機会を得ています。仏が意図したとおりに、教えを理解できることを願っています。

次懺悔

一遍

実叉難陀訳『大方広仏華嚴經』『普賢行願品』偈

我昔所造諸惡業
皆由無始貪瞋癡

從身語意之所生
一切我今皆懺悔

私は「貪りと怒りと愚かさ」が原因で、「身体と言葉と意識」の働きの中で、何度も生まれ変わりながら様々な悪い行いとその結果を生み出してきました。今、その全てを懺悔します。

次 三歸

三遍

弟子某甲

盡未來際

歸依佛

歸依法

歸依僧

Skt. buddhaṃ śaraṇaṃ gacchāmi/ dharmāṃ śaraṇaṃ gacchāmi/ saṃghaṃ śaraṇaṃ gacchāmi//

仏の弟子である私は、未来が終わる時まで、仏を信じ、仏の教えを信じ、仏の教えを実践する出家者の集まり（サンガ）を信じることを誓います。

次 三竟

三遍

弟子某甲

盡未來際

歸依佛竟

歸依法竟

歸依僧竟

仏の弟子である私は、未来が終わる時まで、仏を信じ、仏の教えを信じ、仏の教えを実践する出家者の集まり（サンガ）を信じています。

次十善戒

三遍

実叉難陀訳『大方広仏華嚴經』「十地品」

弟子某甲

盡未來際

不殺生

不偷盜

不邪淫

不妄語

不綺語

不惡口

不兩舌

不慳貪

不瞋恚

不邪見

仏の弟子である私は、未来が終わる時まで、

【身体】生きているあらゆる存在を傷つけず、与えられていない物を自分の物とせず、

夫婦関係を壊すような邪な男女関係を持ちません。

【言葉】意図的に嘘をつかず、綺麗ごとのような余計なことを言わず、悪口を言わず、

人と人の絆を裂くような二枚舌を使いません。

【意識】出し惜しみせず必要以上に欲しがらず、怒りの感情に包み込まれること無く、

因果応報の道理を信じない考えを持つことはない、と、誓います。

次般若心經

佛說摩訶般若波羅蜜多心經

亦無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。以無
無意識界。無無明盡。乃至無老死。
耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼耳鼻
不增減。是故空中無色。無受想行識。不
是舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢
異色。即是空。即是非色。受想行識亦復
蘊皆空。度一切苦厄。舍利子。色不異空。
觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見
五

般 はん	菩 ぼ	揭 ぎや	多 た	咒 しゆ	多 た	得 とく	想 そう	罽 け	所 しよ
若 にや	提 ち	諦 てい	咒 しゆ	能 のう	是 ぜ	阿 あ	究 く	礙 げ	得 とつ
心 しん	薩 そ		卽 そく	除 じよ	大 だい	耨 のく	竟 きやう	無 む	故 こ
經 ぎやう	婆 わ	揭 ぎや	說 せつ	一 いつ	神 じん	多 た	涅 ね	罽 け	菩 ぼ
	訶 か	諦 てい	咒 しゆ	切 さい	咒 しゆ	羅 ら	槃 はん	礙 げ	提 だい
			曰 わつ	苦 く	是 ぜ	三 さん	三 さん	故 こ	薩 さつ
	波 は			眞 しん	大 だい	藐 みやく	世 ぜ	無 む	埵 た
	羅 ら			實 じつ	明 みやう	三 さん	諸 しよ	有 う	依 え
	揭 ぎや			不 ふ	咒 しゆ	菩 ぼ	佛 ぶつ	恐 く	般 はん
	諦 てい			虛 こ	是 ぜ	提 だい	依 え	怖 ふ	若 にや
				故 こ	無 む	故 こ	般 はん	遠 おん	波 は
	波 は			說 せつ	上 じやう	知 ち	若 にや	離 り	羅 ら
	羅 ら			般 はん	咒 しゆ	般 はん	波 は	一 いつ	蜜 みつ
	僧 そう			若 にや	是 ぜ	若 にや	羅 ら	切 さい	多 た
	揭 ぎや			波 は	無 む	波 は	蜜 みつ	顛 てん	故 こ
	諦 てい			羅 ら	等 とう	羅 ら	多 た	倒 とう	心 しん
				蜜 みつ	等 とう	蜜 みつ	故 こ	夢 む	無 む

次觀音經偈

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五偈

或	或	假	我	弘	具	世	
在	漂	使	爲	誓	足	尊	
須	流	興	汝	深	妙	妙	
彌	巨	害	略	如	相	相	
峯	海	意	說	海	尊	具	
爲	龍	推	聞	歷	偈	我	
人	魚	落	名	劫	答	今	
所	諸	大	及	不	無	重	
推	鬼	火	見	思	盡	問	
墮	難	坑	身	議	意	彼	
念	念	念	心	侍	汝	佛	
彼	彼	彼	念	多	聽	子	
觀	觀	觀	不	千	觀	何	
音	音	音	空	億	音	因	
力	力	力	過	佛	行	緣	
如	波	火	能	發	善	名	
日	浪	坑	滅	大	應	爲	
虛	不	變	諸	清	諸	觀	
空	能	成	有	淨	方	世	
住	沒	池	苦	願	所	音	

雲 うんらいくせいでん	虻蛇 がんじゃぎゅうふつ 及 及 蝮蛇 ふつかつ	若 にやくあくくじゅうい 惡獸圍繞 によう	或 わくぐわあくら 遇惡羅刹 せつ	呪詛 しゅそしよどくやく 諸毒藥	或 わくしゅうきんか 囚禁枷鎖 さ	或 わくそうおうなん 遭王難苦	或 わくちおんぞく 值怨賊繞 によう	或 わくひあくにん 被惡人逐 ちく
降 ごうばくじゅだい 雹澍大雨	氣 けどくえんくわねん 毒煙火燃	利 りげそうかふ 牙爪可怖	毒 どくりゅうしよきとう 龍諸鬼等	所 しよよくがいしん 欲害身者	手 しゅそくひちゅうかい 足被杻械	臨 りんぎょうよくじゅじゅう 刑欲壽終	各 かくしゅうとう 執刀加害 がい	墮 だらくこんごう 落金剛山
念 ねんびくわんのん 彼觀音力	念 ねんびくわんのん 彼觀音力	念 ねんびくわんのん 彼觀音力	念 ねんびくわんのん 彼觀音力	念 ねんびくわんのん 彼觀音力	念 ねんびくわんのん 彼觀音力	念 ねんびくわんのん 彼觀音力	念 ねんびくわんのん 彼觀音力	念 ねんびくわんのん 彼觀音力
應 おうじとくしやうさん 時得消散	尋 じんじやう 聲自回 えこ 去	疾 しつそうむへん 走無邊方	時 じしつ 悉不敢害 がい	還 げんぢやく 著於本人	釋 しゃくねん 然得解脫 げだつ	刀 とうじん 尋段段壞 ね	咸 げんそく 卽起慈心 しん	不 ふのう 能損 そん 一毛 いちもう

念 ねん 念 ねん 勿 もつ 生 しょう 疑 ぎ	妙 みょう 音 おん 觀 くわん 世 ぜ 音 おん	諍 じょう 訟 しょう 經 きょう 官 くわん 處 じょ	悲 ひ 體 たい 戒 かい 雷 らい 震 しん	無 む 垢 く 清 しょう 淨 じょう 光 こう	眞 しん 觀 くわん 清 しょう 淨 じょう 觀 くわん	種 しゅ 種 じゅ 諸 しよ 惡 あく 趣 しゅ	具 ぐ 足 そく 神 じん 通 つう 力 りき	衆 しゅ 生 じょう 被 ひ 困 こん 厄 やく
觀 くわん 世 ぜ 音 おん 淨 じょう 聖 しょう	梵 ぼん 音 のん 海 かい 潮 ちよう 音 おん	怖 ふ 畏 い 軍 ぐん 陣 ちん 中 ちゅう	慈 じ 意 い 妙 みょう 大 だい 雲 うん	慧 え 日 にち 破 は 諸 しよ 闇 あん	廣 こう 大 だい 智 ち 慧 え 觀 くわん	地 ぢ 獄 ごつ 鬼 き 畜 ちく 生 しょう	廣 こう 修 しゅ 智 ち 方 ほう 便 べん	無 む 量 りよう 苦 く 逼 ひつ 身 しん
於 お 苦 く 惱 のう 死 し 厄 やく	勝 しょう 彼 ひ 世 せ 間 けん 音 のん	念 ねん 彼 び 觀 くわん 音 のん 力 りき	澍 じゅ 甘 かん 露 ろ 法 ほう 雨 う	能 のう 伏 ぶく 災 さい 風 ふう 火 くわ	悲 ひ 觀 くわん 及 ぎゅう 慈 じ 觀 くわん	生 しょう 老 ろう 病 びよう 死 し 苦 く	十 じつ 方 ほう 諸 しよ 國 こく 土 ど	觀 くわん 音 のん 妙 みょう 智 ち 力 りき
能 のう 爲 い 作 さ 依 え 怙 こ	是 ぜ 故 こ 須 しゅ 常 じよう 念 ねん	衆 しゅ 怨 おん 悉 しつ 退 たん 散 さん	滅 めつ 除 じょ 煩 ぼん 惱 のう 焰 えん	普 ふ 明 みよう 照 しょう 世 せ 間 けん	淨 じよう 願 がん 常 じよう 瞻 せん 仰 ごう	以 い 漸 ぜん 悉 しつ 令 りよう 滅 めつ	無 む 刹 せつ 不 ぶ 現 げん 身 しん	能 のう 救 く 世 せ 間 けん 苦 く

具一切功德。慈眼視衆生。福聚海無量。是故應頂禮。

爾時持地菩薩。卽從座起。前白佛言。世尊。若有衆生。聞是觀世音菩薩品。自在之業。普門示現。神通力者。當知是人功德不少。

佛說是普門品時。衆中八萬四千衆生。皆發無等等阿耨多羅三藐三菩提心。

次諸眞言

七遍或は三遍

③			②			①		
粉河観音宗 粉河寺			救世観音宗 紀三井寺			青岸渡寺 天台宗		
御詠歌	伝教大師	天台大師	千手観音	御詠歌	弘法大師	十一面観音	御詠歌	伝教大師
ちちははの恵みも深き粉河寺ほとけの誓ひたのもしの身や	南無宗祖根本伝教大師福聚金剛	南無高祖天台智者大師	おん ばさら だるま きりく そわか	ふるさとをはるばるここに紀三井寺花の都も近くなるらん	南無大師遍照金剛	おん ばざら だらま きりく	補陀洛や岸打つ波は三熊野の那智のお山にひびく滝津瀬	南無宗祖根本伝教大師福聚金剛
								如意輪観音
								おん ばらだ はんどめい うん

⑥			⑤			④						
壺 阪 寺 （真言）			御 真 葛 室 言 井 派 宗 寺			天 施 台 福 宗 寺						
御 詠 歌	弘 法 大 師	千 手 観 音	御 詠 歌	宇 多 法 皇	弘 法 大 師	千 手 観 音	御 詠 歌	弘 法 大 師	伝 教 大 師	天 台 大 師	千 手 観 音	弥 勒 菩 薩
岩をたて水をたたえて壺阪の庭のいさごも浄土なるらん	南無大師遍照金剛	おん ばざら だらま きりく	参るより頼みをかくる葛井寺花のうてなに紫の雲	南無禅定法皇	南無大師遍照金剛	おん ばざら だらま きりく	深山路や檜原松原わけ行けば巻の尾寺に駒ぞいさめる	南無大師遍照金剛	南無宗祖根本伝教大師福聚金剛	南無高祖天台智者大師	おん ばざら だるま きりく そわか	おん まいたれいや そわか

⑨		⑧					⑦				
法南	相円	豊山	真言	長谷			豊山	真言	岡寺		
宗堂		派宗		寺			派宗		寺		
御詠歌	不空羅索	御詠歌	専誉僧正	興教大師	弘法大師	十一面観音	御詠歌	専誉僧正	興教大師	弘法大師	如意輪観音
春の日は南円堂にかがやきて三笠の山に晴るうす雲	おん はんどま だら あぼきや じゃやでい そろそろ そわか	いくたびも参る心ははつせ寺山もちかいも深き谷川	南無専誉僧正	南無興教大師	南無大師遍照金剛	おん まかきやろにきや そわか	けさ見ればつゆ岡寺の庭の苔さながら瑠璃の光なりけり	南無専誉僧正	南無興教大師	南無大師遍照金剛	おん はんどめい しんだまに じんばら うん

⑫				⑪				⑩					
岩間寺 （単立真言）				醍醐派 真言宗 醍醐寺				三室戸寺 本山修験宗					
御詠歌	泰澄大師	弘法大師	千手観音	御詠歌	役行者	理源大師	弘法大師	准胝観音	御詠歌	役行者	智證大師	増誉大僧正	千手観音
水上はいづくなるらん 岩間寺岸うつ波は松風の音	南無泰澄神融禪師	南無大師遍照金剛	おん ばざら だらま きりく	逆縁ももらさで救う願なれば 准胝堂はたのもしきかな	南無神變大菩薩	南無聖寶尊師	南無遍照金剛	おん しゃれい それい そんदै そわか	夜もすがら月を三室戸わけゆけば 宇治の川瀬に立つは白波	南無神變大菩薩	南無大師智慧金剛	南無増誉大僧正	おん ばざら だらま きりく

⑬	⑭	⑮	⑯
石山寺 東寺真言宗	三井寺 天台寺門宗	今熊野 観音寺 真言宗 泉涌寺派	清水寺 北法相宗
如意輪観音 弘法大師 御詠歌	天台大師 智證大師 御詠歌	十一面観音 弘法大師 御詠歌	千手観音 御詠歌
おん はんどもい しんだまに じんばら うん 南無大師遍照金剛 後の世を願うところはかるくともほとけの誓いおもき石山	おん はどま しんだまに じばら うん 南無高祖天台智者大師 南無曩祖智証大師智慧金剛 いで入るや波間の月を三井寺の鐘のひびきにあくる湖	おん まかきやろにきや そわか 南無大師遍照金剛 昔より立つとも知らぬ今熊野ほとけの誓いあらたなりけり	おん ばざら だらま きりく 松風や音羽の滝の清水をむすぶ心は涼しかるらん

②⑦	①⑨	①⑧	①⑦
善峰観音宗 善峯寺	天台宗 革堂	単立(天台) 六角堂	智真蜜六 山言波 派宗寺羅
御詠歌 天台大師	御詠歌 伝教大師	御詠歌 伝教大師	御詠歌 興教大師
野をもすぎ山路にむかふ雨の空善峯よりも晴るる夕立	南無高祖天台智者大師 南無宗祖根本伝教大師福聚金剛 花を見ていまは望みも革堂の庭の千草も盛りなるらん	南無高祖天台智者大師 南無宗祖根本伝教大師福聚金剛 わが思う心のうちは六の角ただ円かれと祈るなりけり	南無興教大師 南無大師遍照金剛 おんろけいじんばらきりくそわか おんばらだはんどめいうん 重くとも五つの罪はよもあらし六波羅堂へ参る身なれば

②④			②③			②②			②①				
山 寺 派	真 言 宗 中	中 ^{なか} 山 ^{やま} 寺 ^{でら}	単 ^{たん} 立 ^{りつ} (真言)	勝 ^{かつ} 尾 ^お 寺 ^じ		真 言 宗	高 野 山	総 ^{そう} 持 ^ぢ 寺 ^じ	天 ^{てん} 台 ^{だい} 宗	穴 ^{あな} 太 ^お 寺 ^じ			
御 ^ご 詠 ^{えい} 歌 ^か	弘 ^{こう} 法 ^{ぽう} 大 ^{だい} 師 ^し	十一 ^{じゅういち} 面 ^{めん} 観 ^{かん} 音 ^{おん}	御 ^ご 詠 ^{えい} 歌 ^か	弘 ^{こう} 法 ^{ぽう} 大 ^{だい} 師 ^し	千 ^{せん} 手 ^{じゅ} 観 ^{かん} 音 ^{おん}	御 ^ご 詠 ^{えい} 歌 ^か	弘 ^{こう} 法 ^{ぽう} 大 ^{だい} 師 ^し	千 ^{せん} 手 ^{じゅ} 観 ^{かん} 音 ^{おん}	御 ^ご 詠 ^{えい} 歌 ^か	伝 ^{でん} 教 ^{ぎょう} 大 ^{だい} 師 ^し	天 ^{てん} 台 ^{だい} 大 ^{だい} 師 ^し	聖 ^{しょう} 観 ^{かん} 音 ^{おん}	薬 ^{やく} 師 ^し 如 ^{にょ} 来 ^{らい}
野 ^の をも すぎ 里 ^{さと} をも ゆきて 中山 ^{なかやま} の 寺 ^{でら} へ 参 ^{まい} る は 後 ^{のち} の 世 ^よ のため	南 ^な 無 ^む 大 ^{だい} 師 ^し 遍 ^{へん} 照 ^{じょう} 金 ^{こん} 剛 ^{ごう}	おん まかきやろにきや そわか	重 ^{おも} くとも 罪 ^{つみ} には 法 ^{のり} の 勝 ^{かち} 尾 ^お 寺 ^{でら} ほとけを 頼 ^{たの} む 身 ^み こそ やすけれ	南 ^な 無 ^む 大 ^{だい} 師 ^し 遍 ^{へん} 照 ^{じょう} 金 ^{こん} 剛 ^{ごう}	おん ばざら たらま きりく	おしなべて 老 ^お いも 若 ^{わか} きも 総 ^{そう} 持 ^ぢ 寺 ^じ の ほとけの 誓 ^{ちか} い 頼 ^{たの} まぬ はなし	南 ^な 無 ^む 大 ^{だい} 師 ^し 遍 ^{へん} 照 ^{じょう} 金 ^{こん} 剛 ^{ごう}	おん ばざら たらま きりく	か かる 世 ^よ に 生 ^う まれ あふ 身 ^み の あな 憂 ^う や と思 ^{おも} は で 頼 ^{たの} め 十 ^と 声 ^{こえ} 一 ^{いっ} 声 ^{ごえ}	南 ^な 無 ^む 宗 ^{しゅう} 祖 ^そ 根 ^{こん} 本 ^{ほん} 伝 ^{でん} 教 ^{ぎょう} 大 ^{だい} 師 ^し 福 ^{ふく} 聚 ^{じゅ} 金 ^{こん} 剛 ^{ごう}	南 ^な 無 ^む 高 ^{こう} 祖 ^そ 天 ^{てん} 台 ^{だい} 智 ^ち 者 ^{しゃ} 大 ^{だい} 師 ^し	おん あろりきや そわか	おん ころころ せんだりまとうぎ そわか

(27)	(26)	(25)
天 圓 台 教 宗 寺	天 一 台 乗 宗 寺	天 清 播 台 水 宗 寺 州
御 詠 歌 伝 教 大 師 天 台 大 師 如意輪観音	御 詠 歌 伝 教 大 師 天 台 大 師 聖 観 音	御 詠 歌 伝 教 大 師 天 台 大 師 千 手 観 音
はるばるとのぼれば書寫の山おろし松のひびきも御法なるらん	春は花夏は橘秋は菊いつも妙なる法の華山	あはれみや普き門の品々になにかなみのここに清水

③⑩					②⑨					②⑧		
豊 真 宝 山 言 嚴 派 宗 寺					醍 真 松 醐 言 尾 派 宗 寺					橋 成 立 相 真 言 寺 宗		
御 詠 歌	専 譽 僧 正	興 教 大 師	弘 法 大 師	千 手 觀 音	御 詠 歌	役 行 者	理 源 大 師	弘 法 大 師	馬 頭 觀 音	御 詠 歌	弘 法 大 師	聖 觀 音
月も日も波間に浮かぶ竹生島船に宝を積むこちちして	南無専譽僧正	南無興教大師	南無大師遍照金剛	おん ばざら たらま きりく	そのかみは幾世経ぬらん便りをば千歳もここに松の尾の寺	南無神變大菩薩	南無聖寶尊師	南無遍照金剛	おん あみりと どはんば うんぱった そわか	波の音松のひびきも成相の風ふきわたす天の橋立	南無大師遍照金剛	おん あろりきや そわか

③③					③②			③①				
華厳寺 天台宗					観音正寺 単立(天台)			長命寺 単立(天台)				
御詠歌	御詠歌	御詠歌	伝教大師	天台大師	十一面観音	御詠歌	千手観音	御詠歌	伝教大師	天台大師	千手観音	
今までは親と頼みし笈摺を脱ぎて納むる美濃の谷汲	万世の願いをここに納めおく水は苔より出る谷汲	世を照らす仏のしるしありければまだともしびも消えぬなりけり	南無宗祖根本伝教大師福聚金剛	南無高祖天台智者大師	おん まかきやろにきや そわか	あなとうと導きたまえ観音寺遠き国より運ぶ歩みを	おん ばざら だらま きりく	八千年や柳に長き命寺運ぶ歩みのかざしなるらん	南無宗祖根本伝教大師福聚金剛	南無高祖天台智者大師	おん ばざら だるまきりく そわか	

外 番				外 番				外 番					
花 真 花 山 言 山 院 宗 院				天 元 台 慶 宗 寺				豊 真 法 山 言 起 派 宗 院					
御 詠 歌	花 山 法 皇	弘 法 大 師	薬 師 如 来	御 詠 歌	花 山 法 皇	伝 教 大 師	天 台 大 師	薬 師 如 来	御 詠 歌	徳 道 上 人	専 譽 僧 正	興 教 大 師	弘 法 大 師
有馬富士麓の霧は海に似て波かと聞けば小野の松風	南無花山入覚大法皇	南無大師遍照金剛	おん ころころ せんだりまとうぎ そわか	待てといわばいとまかしこし花山にしばしと啼かん鳥の音もがな	南無花山入覚大法皇	南無宗祖根本伝教大師福聚金剛	南無高祖天台智者大師	おん ころころ せんだりまとうぎ そわか	極楽はよそにはあらじわがこころおなじ蓮のへだてやはある	南無徳道上人	南無専譽僧正	南無興教大師	南無大師遍照金剛

『不空羂索毘盧遮那佛大灌頂光真言』

おん あ ぼ きや べい ろ しや のう

ਭੰਗ ਸਾਖਾ ਪੰਥਾ ਬਾ

マ ま
カ か
ク く
コ こ
マ ま
メ め
パ は
キ き
ク く
コ こ
パ は
バ ば
キ き
ク く
コ こ
ン ん

skt. om amoghavairocanamahāmudrāmaṇipadmajala pravarttaya hūm/

オーン、遍照大日の大いなる印に住するものよ、摩尼宝珠（物質）と蓮華（心）と光明（命そのもの）との徳があるものよ、私の身体を無限なる遍照大日へと転ぜしめよ。フーン

次
觀くわん
音のん
名みょう
號ごう

七遍ななへん或あるいは三遍さんべん

南無大慈大悲觀世音菩薩

一切衆生に樂を与え（大慈）、一切衆生の苦しみを抜く（大悲）、観世音菩薩に帰依します。

次廻向文

『法華經』「化城喻品」偈

願以此功德

普及於一切

我等與衆生

皆共成佛道

願わくばこの功德をもって、普く一切に及ぼし、我らと衆生と皆共に仏道を成ぜん。
※廻向文、「皆共」まで読み進めば念誦を摺り、読経の功德によって、みんなそろって仏の道に進むことを願い、頭を下げお祈りします。

次禮拜

読経が終われば衣体と姿勢を整え胸の前で合掌し一礼或は三礼

おん
さ
らば
た
た
ぎや
た

は
な
ま
ん
の
う
き
や
ろ
み

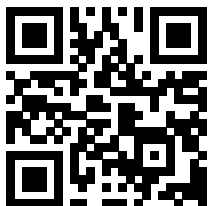
skt. om sarvathāgatapādāvananāṃ karomi/

オーム、私はあらゆる御仏の御足に礼拝します。

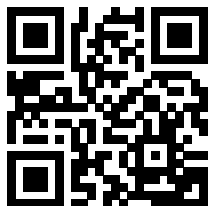


西^{さい}
國^{こく}
三^{さん}
十^{じゅう}
三^{さん}
所^{しょ}
巡^{じゅん}
禮^{れい}

佛^{ぶつ}
前^{ぜん}
勤^{ごん}
行^{ぎょう}
次^し
第^{だい}
畢^{おわんぬ}



西国三十三所
公式サイト



平等寺オンライン



日本遺産
1300 年つづく
日本の終活の旅



さいこくさんじゅうさんしよ えん ま だいおう ご ほういん 西国三十三所のはじまり・閻魔大王の御宝印

さいこくさんじゅうさんしよえん ま だいおう とくどうしやうにん で あ はじ よう
西国三十三所巡礼は、閻魔大王と徳道上人の出会いから始まりました。養
ろう に ねん ねん な ら は せ で ひら どうみよう で し とくどうしやうにん やまい たお
老二年（718 年）、奈良の長谷寺を開いた道明の弟子・徳道上人は病に倒れ、
めい ど えん ま だいおう たいめん えん ま だいおう ひとびと すく さんじゅうさん かのん
冥土で閻魔大王と対面します。閻魔大王は「人々を救うために三十三の観音
れいじよう ひら じゅんれい すず つ とくどうしやうにん きしやうもん さんじゅうさん ご ほういん
霊場を開き、巡礼を勧めよ」と告げ、徳道上人に起請文と三十三の御宝印
を授けました。現世に戻った徳道上人は、お告げの通りに三十三の観音霊場
を創設し、人々に巡礼を奨励したと伝えられています。



か ざんほうおう かいそう えん ぎ 花山法皇による開創の縁起

しかし、徳道上人の観音霊場はすぐには広まりませんでした。当時の人々
に受け入れられず、御宝印は兵庫・中山寺の石櫃に隠されました。
それから 270 年。寛和の変（986 年）で出家した花山法皇は、青岸渡寺
での修行中に熊野権現から「徳道上人の巡礼地を再興せよ」とのお告げを受
けます。法皇は御宝印を見つけ出し、数名の僧侶たちと共に三十三の観音
霊場を巡礼。再び閻魔大王の御宝印を広めました。この旅の中で花山法皇
が詠んだ和歌は、各札所の御詠歌として今日も伝えられています。



さいこくさんじゅうさんしよ はってん げんざい 西国三十三所の発展と現在

さい こ じゅんれい きろく み い でら ぎやうそん かのんれいしよさんじゅうさんしよえんれい き ねんごろ
最古の巡礼記録は三井寺の行尊「観音霊所三十三所巡礼記」（1092 年頃）
です。この巡礼記では一番札所が長谷寺とされていますが、熊野詣が普及す
るにつれ、次第に青岸渡寺が一番札所となりました。15 世紀中頃までには
ふだしよばんごう げんざい いっぱん じゅんれいしや ふ とくごく ひとびと さいこく
札所番号が現在のものとなり、一般の巡礼者も増え、東国の人々から「西国
さんじゅうさんしよ した
三十三所」として親しまれるようになりました。

げんざい さいこくさんじゅうさんしよえんれい ねん に ほん しやうかつ たび に ほん
現在、西国三十三所巡礼は「1300 年つづく日本の終活の旅」として日本
い さん とうろく かのん じ ひ ごしやう あんじん もと こんにち おお じゅんれい
遺産に登録され、観音さまの慈悲や後生の安心を求めて今日も多くの巡礼
者で賑わっています。

西国三十三所巡礼

仙前勤行次第 白水文庫 5

平成卅年五月廿二日 発行

平成卅年七月廿二日 改定第二版発行

令和五年十月一日 改定第三版発行

令和六年五月廿八日 改定第四版発行

編集 住職 谷口真梁

四国八十八ヶ所霊場
第二十二番札所平等寺

発行所 平等講事務局

徳島県阿南市新野町秋山一七七番地

食時略作法^{じきりやくさほう}

食前のことば

一滴の水にも天地の大いなる恵があり、

一粒のお米にも萬民の努力がこもっております。

私が生きていることはこれらの恩恵によるものです。

いただきます。

食後のことば

ごちそうさまでした。

西國三十三所巡禮

佛前勤行次第

白水文庫 5